

県立那珂湊高等学校 産学連携プロジェクト 「油屋熊八翁像ペイント完成お披露目会」を実施

本校では、亀の井ホテル大洗との産学連携プロジェクトの一環として、同ホテルの創業者であり「別府観光の父」として知られる油屋熊八翁像のペイント制作に取り組んでまいりました。

学生ならではの自由な発想と熊八翁への敬意を込めて色彩を施した像がこのほど完成し、下記のとおり「油屋熊八翁像ペイント完成お披露目会」を行います。ぜひ御取材ください。

記

- 1 日 時 令和 7 年 10 月 24 日（金） 10：00～（所要時間：約 30 分を予定）
- 2 場 所 亀の井ホテル大洗 ロビー
（東茨城郡大洗町磯浜町 7986-2）
- 3 目 的 学生たちが地域文化への理解を深め、実践的な制作活動を通じて社会に貢献すること
- 4 内 容（予定）
 - （1）主催者挨拶
 - （2）油屋熊八翁像 除幕
 - （3）担当者インタビュー
 - （4）生徒インタビュー
 - （5）写真撮影※ お披露目会終了後、担当学生や関係者への囲み取材の時間を設ける予定です。
- 5 その他 御取材いただける場合は、10 月 20 日（月）までに以下の問い合わせ先まで御連絡ください。

【本資料についてのお問い合わせ先】

県立那珂湊高等学校 教頭 栗栖 一義 TEL 029-262-2642

【 プロジェクトの経緯について 】

2025 年 6 月、初夏の光が那珂湊高校の教室に差し込む頃、一つの特別なプロジェクトが舞い込んできた。それは、全国に展開する「亀の井ホテル」からの、まさに産学連携を象徴するような依頼だった。

「かんぼの宿」からリブランドしたばかりの同ホテルは、そのルーツである別府観光の父・油屋熊八の「おもてなしの精神」を全国に届けようと、熊八の像を各店舗に設置するプロジェクトを進めていた。「地域に開かれたホテル」を目指す彼らは、その土地の魅力を発信するパートナーとして、地元の高校生に白羽の矢を立てたのだ。大洗観光協会からの情報提供も後押しとなり、「地元の方々とつながる」という温かい想いが、那珂湊高校の生徒たちへと託された。

依頼内容は、真っさらな熊八像に、この土地ならではのデザインを施し、命を吹き込むこと。この大きな使命に応えるべく、すぐに 6 名の生徒によるプロジェクトチームが結成された。

6 月 11 日、亀の井ホテルの支配人が直々に来校し、生徒たちにプロジェクトの趣旨を熱く語った。「皆さんの若い感性で、この那珂湊の魅力を熊八像に纏わせてほしいのです」。その言葉に、生徒たちの瞳は期待に輝いた。

プロジェクトは全校生徒を巻き込んだ大きな渦となる。チームは全校生徒 279 名にデザイン案を募集。海、波、あんこう、町のシンボル……。那珂湊への愛情が詰まったアイデアが次々と寄せられた。プロジェクトチームは、集まった数々の案の中から 10 案ほどに絞り込み、それぞれの良い部分を丁寧に紡ぎ合わせていく。海の青、砂浜の白、そして地域を象徴する温かい色彩。議論を重ね、スケッチを描き直し、ついに一つのデザイン案が生まれた。

その後、クライアントであるホテル側と何度もオンラインで打ち合わせを重ね、プロの視点からのアドバイスを受けながらデザインを微調整。高校生の自由な発想と、ホテルのブランドイメージが融合し、7 月、ついに最終デザインが完成した。

そして 7 月 14 日、約束の日。一体の真っ白な油屋熊八像が、静かに学校へ届けられた。その存在感を前に、生徒たちは息をのみ、これから始まる創作への決意を新たにした。

制作は、地道な作業から始まった。像の表面を滑らかにするための研磨作業。塗料が美しくなるように、油分を完全に除去しシリコンオフでの脱脂。美しい作品は、丁寧な下地づくりから生まれる。そのことを、生徒たちは手を動かしながら学んでいった。

いよいよ、ペインティングの段階へ。デザイン画を元にマスキングシートで正確に下書きを行い、アクリル絵の具で慎重に色を重ねていく。一塗り、また一塗り。発色を良くするための 3 度塗り、根気と集中力が試される作業だった。最大の難関は、デザインの要であるグラデーション部分だった。筆だけでは、どうしても色の境目がくっきりと出てしまい、イメージ通りの滑らかな色彩の変化が生まれない。チームは試行錯誤を繰り返した。「どうすれば、あの夕焼けの空のような、波打ち際のような、自然な色の移ろいを表現できるんだろう」。悩んだ末、メンバーの一人がスポンジを使うことを思いついた。絵の具を染み込ませたスポンジで、優しく叩く

ように色を重ねていく。何度も練習を繰り返し、仲間と意見を交わしながら、ついに彼らは、誰もが息をのむほど鮮やかで、自然なグラデーションを完成させた。

全ての彩色が終わり、命が吹き込まれた熊八像。仕上げにクリアーを丁寧に塗布すると、像は深みのある艶やかな輝きを放ち始めた。まるで、那珂湊の海のきらめきをその身に宿したかのようだった。

完成した像を囲む 6 人の顔には、達成感と、プロジェクトが終わってしまう一抹の寂しさが浮かんでいた。この夏、彼らはデザインの難しさ、チームで協力することの尊さ、そして自分たちの手で地域に貢献できるという大きな喜びを知る貴重な学びの機会となった。